

第二 1907年「癩予防二関スル件」

て汚き躰の由（読下し文、筆者）

病気で5、6日前から村に入っていたことが確認されているにもかかわらず、吉田村では全く介抱などをしていない。死後に検死役人呼び、往来手形がないために非人として処理された。「癩病にて至てきたなき躰」という表現が見られるように、きたない「癩」乞食として見捨てられていたのだろう。同じく小松藩の大頭村では、「癩病」の出家遍路が縊死している。

五月十二日 一、大頭村より四十才位の坊主遍路老人、縊死居り候趣届け出る。様子承り糺し候所、盜賊沙汰これあり、今晚盜賊番穢多並村内若者共、所々見廻り、同村西の端葬式道具置場これあり。若や潜み居り候も斗り難しと、戸を開け候処、縊死居り候様、元山岩吉申し出る。変死の儀、仮御徒士目付長谷部真之丞に見分相達し候所、腹痛断り申し出、西哲之助御徒士目付代見分に相達し、同人出張見分候所、指して相替わる儀これなく、尤も血流れ居り候に付き改め候所、癩病と相見え、足も腫れ、左の足脚半脇より膿血交り出居り、刃物疵などにはこれなし。納経箱所持。大坂寺島町淡路屋嘉平治借家戎屋藤助と申者にて、同町役人並生国大坂にて持宝院寺送これあり。外に荷物これなく、全く難儀に迫り縊死候と相見え、聊かも怪しき儀、御座なく候につき、村法通り仮埋め申し付け候段申し出る（読み下し文引用者）

縊死したのは大坂出身の40才位の出家姿の遍路で、所持品は納経箱だけだった。大坂から旅を続けてここまで来たが、「全く難儀に迫り縊死候と相見え」と「見分」の役人の記録にあるように、無一文となっけし、その上に脚が腫れて膿血が出、もはや生きる希望をなくして自ら命を絶ったのだろう。

上記のような旅する「癩者」の目的地のひとつは、既述のように温泉である。「癩」の温泉治療は中世以来の伝統で、近世の医学書にも登場する。有馬・城崎・草津などには、病人救恤の一環として無料の「非人湯」が設置されていた。それ以外の温泉地でも、同様の湯壺があったことを想定してもよいだろう。

もちろん資力がある間は一般の湯壺にも有料で入浴しており、城崎温泉にも草津温泉にも「癩」に効くと言われた湯壺があった。

また有馬温泉では幕末に温泉宿の経営者達が「非人湯」を潰したために、幕府の叱りを受けて再建するという事態も起こっている。このことは温泉地に無料の「非人湯」を設けるのは当然であるという認識が、各温泉地だけではなく為政者の側にもあったことを示している。

4. 在宅患者の生活

『渡辺幸庵対話』（著者、成立年未詳）は、江戸時代前期の古武士の語りを記した随筆である。幸庵はある時偶然に門前で、「癩」病薬の製法を記した紙を拾得した。非常によく効く薬なので対話者にも製法を伝授しようともちかける。その際、「此病気は貴賤に寄らず、殊に過半歴々にある物也。家中の病に候間、可相伝」、つまり「癩」は家柄の善し悪しによらずかかる病気で、しかも「過半」